

『古今医統大全』の鍼灸について(第3報)

田中利江子

日本鍼灸研究会

〔緒言〕 徐春甫(生没年不詳)の著した『古今医統大全』百巻は、明の嘉靖35(1556)年に成立した医学全書で、明以前の歴代の医書及び経史百家の医学に関する資料を取録、古説を引いて医学理論を簡明に論じている。また本書に述べられている鍼灸は、明代鍼灸を考える上においても、また日本近世鍼灸に対する影響という面からも重要である。演者は第112・113回本学会総会において『古今医統大全』の鍼灸について報告を行った。今回の発表では、巻7「鍼灸直指」に採録される歌賦について調査、解析を行う。

〔解析〕 巻7「鍼灸直指」に著録される13歌賦、A禁鍼歌、B禁灸歌、C太乙人神歌、D補写雪心歌、E天元太乙歌、F玉龍賦、G標幽賦、H通玄指要賦、I靈光賦、G席弘賦、K銅人指要賦、L肘後歌、M百證賦を、①『鍼経指南』(元・至元13年〔1276〕以前成立)、②『扁鵲神心鍼灸玉龍経』(元・天歴2年〔1329〕刊行)、③『医経小学』(明・洪武21年〔1388〕序例)、④『鍼灸大全』(明・正統4年〔1439〕成立)、⑤『鍼灸聚英』(明・嘉靖8年〔1529〕刊行)、⑥『医学入門』(明・隆慶5年〔1571〕成立)、⑦『鍼灸大成』(明・万歴29年〔1601〕刊行)と対比した。その際、誤字、脱字、刪去を有するものも9割程度対応すれば一致とみなした。その結果、①はG、H、②はG、③は全て、④はA、B、C、G、H、I、J、⑤は全て、⑥は対応無し、⑦はF、G、H、I、Jが一致した。なお典拠のうち、『医経小学』と『鍼灸聚英』は全てその内容が一致しているが、昨年発表の「巻6「経穴発明」における経穴と鍼灸法」では、『鍼灸聚英』がほぼ踏襲されていた結果からすれば、『鍼灸聚英』が典拠といえよう。

次に13歌賦(A～M)の内容を、①原理、②鍼灸心得、③三陰三陽(十二経絡を含む)、④五蔵(五行)、⑤病證+治療穴、⑥脈状、⑦鍼法指示、⑧深度、⑨灸法指示、⑩壯数、⑪術法(補写、留鍼時間など)、⑫禁鍼、⑬禁灸の有無について、歌賦別に分類した。その結果、Aは⑤、⑦、⑧、⑫、Bは⑬、Cは④、Dは①、②、⑦、Eは②、⑤、⑥、⑦、⑧、⑪、Fは⑤、⑥、⑦、⑨、⑪、Gは①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑪、⑫、⑬、Hは②、③、⑤、⑦、Iは②、③、④、⑤、⑦、⑨、⑪、Jは②、⑤、⑦、⑨、⑪、⑫、Kは①、②、④、⑥、⑦、⑪、Lは⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、Mは②、⑤、⑦、を論述していた。逆に内容(①～⑬)別に集計すると、①を論じているのは3歌賦、②は8歌賦、③は3歌賦、④は4歌賦、⑤は9歌賦、⑥5歌賦、⑦は11歌賦、⑧は4歌賦、⑨は5歌賦、⑩は1歌賦、⑪は7歌賦、⑫は3歌賦、⑬は2歌賦であった。13歌賦を内容から大別すると、⑤病證と治療穴が中心の8歌賦とそれ以外(原理や鍼灸心得を論述するもの：D補写雪心歌、K銅人指要賦。曆について：C太乙人神歌、A禁鍼歌、B禁灸歌)であった。

さらに、⑦刺法指示の有る11歌賦について、「鍼」もしくは「刺」の文字数を抽出すると、Aは4回、Dは9回、Eは29回、Fは6回、Gは39回、Hは5回、Iは8回、Jは30回、Kは13回、Lは16回、Mは9回であった。また⑨灸法指示の有る5歌賦について、「灸」の文字数を抽出すると、Fは2回、Gは2回、Iは4回、Jは2回、Lは2回であった。

〔結果と考察〕 『古今医統大全』記載の鍼灸歌賦は、病證に対応する治療穴の記述が多く、鍼法の割合が高い。特に前掲の5～6巻に引用される「標幽賦」や「通玄指要賦」は、原理から治療法まで幅広く網羅し、簡便な文体により初学者でも臨床に役立つよう構成されている歌賦である。